

それまでは、仙台育英高校野球部の須江航監督のことは、よくはわからなかった。野球部の不祥事を受けて監督に就任したこと、仙台育英学園の中学校である秀光中学校を全国優勝させたことくらいの子供知識だった。

須江監督にまず驚かされたのは、準決勝で聖光学院高校に勝利した後のインタビューである。そのコメント力が印象に残った。結果的には大きな点差がついたが、展開次第では逆の結果になっていたかもしれない話をし、聖光学院高校を称えていた。それが心からの発言だということがわかる。だから、人の心に響く。須江監督の人間性が出ていた。

そして、決勝戦を勝ち抜き、東北に初めて深紅の大優勝旗をもたらすことになった後のインタビューである。全国を感動の渦に巻き込んだ、あのコメント、いやスピーチである。

宮城のみなさん、東北のみなさん、おめでとうございます。100年開かなかった扉が開いたので、多くの人の顔が浮かびました。

入学どころか中学校の卒業式もちゃんとできなくて、高校生活というのは、僕たち大人が過ごしてきた高校生活とはまったく違うんです。青春って密。でもそういうことは全部ダメダメだと言われ、活動をしてても、どこかでストップがかかり、どこかでいつも止まってしまう苦しい中で本当にあきらめないでやってくれた。

でも、それをさせてくれたのは僕たちだけじゃなくて全国の高校生みんながやってくれた。例えば、今日の下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとか、そういう目標になるチームがあったからどんなときでもあきらめないで暗い中でも走っていった。すべての高校生の努力のたまもの、ただただ最後、僕たちがここに立ったというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手をしてもらえたらと思います。

また、こんなことも話している。

変な表現なんですけど、宮城大会の1回戦とまったく同じ空気感なんですよ。そしてやるのがうまくいっちゃっている謎の風が吹いていたので、やることやれば結果は後からついてくるから、強気な姿勢と冷静な思考、そして笑顔を忘れずやろうぜと話しました。

決勝戦終了直後、空を見上げていた。

東北6県の人たち、知り合いの顔が浮かびました。それと同じく、これに挑戦していった6県の監督さんや選手の表情が浮かんでいて、みなさんのおかげだなと思いました。

そして、最後には。

扉が開いたので、いろんな学校がなだれ込んできますよ。1回開けば、東北6県の選手や指導者の方々は力があるので。

甲子園には、大阪桐蔭を襲った魔物、聖光学院でも止められなかった流れ、そして今回、謎の風が吹くことを知った。須江航監督は、コメントの中で、下関国際、大阪桐蔭、東北6県のチーム、そして全国の高校生にまで思いを巡らせている。すごい指導者が出てきたものである。時が経ってもずっと残るのは、須江航監督の人間性、人間力であろう。

大阪から新幹線で仙台に戻ってくれた仙台育英高校野球部の皆さんには感謝である。お陰で深紅の大優勝旗が白河の関を越えるところを見届けることができた。高校野球がますます楽しみである。選手だけでなく、各校の監督さんにも注目していきたい。